

電子書籍が読書行動に及ぼす影響と読書文化に関する一考察

菅谷 克行*1

Email: katsuyuki.sugaya.principia@vc.ibaraki.ac.jp

*1: 茨城大学 人文社会科学部 現代社会学科

◎Key Words メディア特性, 読書文化, メディア環境, 電子書籍, 教育改善

1. はじめに

本研究は、電子書籍が読書行動に及ぼす影響と読書文化・習慣について、大学生を対象としたメディア接触調査の結果から考察することを目的とする。学生の読書離れや活字離れが指摘されるようになって久しいが、今、目の前にいる学生の書籍や読書に対する意識や習慣・文化はどのようなものであるのか、そこに電子書籍という新しいメディアはどのような影響を及ぼしているのか、さらにそこから大学の授業・教育の課題や改善策が見えてくるのか、などについて複数の視点から検討を試みる。電子書籍も一つのメディアであるが、メディア・テクノロジーは、我々の生活や社会に様々な影響を及ぼしている。特に電子メディア・テクノロジーが浸透した現代の社会において、教育や学びの場における電子メディア・コンテンツが持つ特徴・特性を起因とする様々な影響力を無視することはできない。最近ではデジタル教科書・教材の展開や電子書籍の普及も進んできているため、書籍メディアの分析は教育における喫緊の課題でもあり、かつ継続的に検討を重ねるべき長期的課題でもある。

本稿では、電子書籍のメディア特性による読書行動の変化について、メディア論の観点から調査・分析し、今後の書籍・読書文化に与える影響について考察する。

2. メディア接触状況の調査

2.1 調査の背景と目的

近年、メディア環境の変化は急速かつ多様化しており、それらが社会および個人の生活に様々な影響を及ぼしていることと考えられる。20世紀には4大メディア（新聞、雑誌、テレビ、ラジオ）と書籍や電話が日々の生活で接触する主なメディアであったが、インターネットの普及後は、ここで展開される多種多様なコンテンツ・サービス（Webサイト、動画・画像共有サービス、SNS、電子書籍など）がそこに加わった。

著者は、電子メディア論の授業を担当していることもあり、近年、学生のメディア接触状況について定期的に調査を行っている。調査の目的としては、学生のメディア接触状況の変化やコンテンツ・サービスの具体的な利用状況をできるだけ詳細に把握し、メディア論の立場から考察するためである。さらに、そこで得た知見から、授業・教育の改善・方略の提案につなげることを目標としている。それと同時に、調査データの単純集計結果は授業時に提示し、授業内で学生と議論をする際の資料にもしている。

本稿では、特にメディア接触状況と書籍・読書文化

について電子書籍の影響力を加味しながら分析することを試みた結果についてまとめる。

2.2 調査の方法

メディア接触に関する調査を著者が担当する電子メディアを扱う授業で例年6月に実施している。履修者数は200名程度、有効回答数としては例年170程度となっている。

当初は質問紙形式での調査であったが、近年は同調査をWebで回答できるようにしており、ほぼ全員がWebで回答している（質問紙を使用するのは、Webへ接続するデバイスを持っていない者程度）。

質問内容は、所有する電子デバイスの種類、平日1日のメディア接触時間（分）、書籍メディア利用（印刷・電子）に関する事、読書習慣に関する事、等である。回答時間の制限は設けていないが、大凡10～15分で回答が完了する程度の内容・分量となっている。

3. 調査結果と考察

3.1 メディア接触の状況

今回の調査データのうち、メディア接触時間の平均値を表1（新聞、雑誌、漫画、書籍の印刷版と電子版）と表2（ブラウザ系メディアとして、テレビ、ネット動画、SNS、Web・アプリ）に示す。

表1 メディア接触時間の平均値（単位：分）

	新聞	雑誌	漫画	書籍
印刷版	5.1	3.4	8.0	19.9
電子版	23.6	0.7	7.1	3.0

表2 メディア接触（ブラウザ系）の平均値（単位：分）

テレビ	ネット動画	SNS	Web/アプリ
61.1	44.4	64.6	52.7

まず表1と表2から判ることは、ブラウザ系のメディア接触時間が全体的に長く、記事や文章など文字を読むメディアの接触時間とは大きな差があるということである（SNSやWebは文字情報を含んでいるが、短文であったり画像に添えられている程度であったりして、その利用状況から飛ばし読み（ブラウズ）することが中心のメディアであると判断し、ブラウザ系としてまとめた）。つまり、書かれている内容を読解により理解する・理解を深める・考えるという行動を促すメディアよりも、短文を飛ばし読みしたり画像や動画として流れてくるコンテンツを閲覧したりするメディア

の方が好まれているのではないかと捉えることもできる。ブラウザ系の平均接触時間を積算すると優に3時間半を超えている。そのため、このブラウザ系メディア利用時間が読解系メディア（新聞、書籍など）の利用時間を圧迫している可能性も指摘できる。

また、表1の印刷版と電子版を比較してみると、新聞は印刷版よりも電子版（新聞社サイト含む）の利用時間のほうが長い。雑誌、漫画、書籍は印刷版の利用時間のほうが長い。スマートフォンなどマルチに利用可能な電子デバイスが普及しているため、電子書籍の潜在的ユーザーは増加していると考えられるが、読解を必要とするコンテンツでの利用時間には十分反映されていないといえる。この傾向は、出版市場規模のデータ（2018年の紙の出版市場は1兆2921億円に対し電子出版市場は2479億円）⁽¹⁾からも読み取れる。電子書籍の市場規模は年々増加しているが、印刷版との差は未だ大きく、書籍メディアといえば印刷書籍がその大半であるという状況は今後も続く可能性がある。

3.2 電子書籍利用によって変化した読書行動

本調査では、書籍メディア利用に関する質問として、接触時間の他に、電子書籍を利用する理由/利用しない理由や、電子書籍を使用することによって変化した読書行動についても回答を求めた。電子書籍の手軽さが、読書行動・習慣に影響を及ぼしているのではないかと考えたためである。

まず電子書籍を利用する理由として、可搬性（持ち運びが楽で外出時に利用できる）、省スペース性（置き場所に困らない）、入手しやすさ（書店に行かなくても欲しい時に入手できる）、書込みに対する抵抗感の軽減（印刷版だと下線やハイライト・メモなどの書き込みが抵抗があるが、電子版ならば抵抗感なく書き込みができる）、無料試読や低価格本（無料本や低価格本、割引キャンペーンを利用して安く購入できる）などがあげられた。これらすべては電子版の特長を表すものであり、その特長を自らの読書生活の利点であると捉えている学生が多く存在することを確認できた。

一方、電子書籍を利用しない理由としては、紙の存在感（ページをめくる操作、本の厚み、紙の質感、紙の匂い、コレクションとして本棚に並べられる）、読みやすさ（目が疲れない、記憶しやすい、進み具合が手でわかる）、などの回答が多いことが判った。これらから、ほぼ全員がスマートフォンを所有し日々使用している状況にあっても、紙の印刷書籍のメディア特性に対する評価が高いことが改めて確認できた。

次に、電子書籍を使用することによって変化した読書行動については、読書時間が増えた（21名）、読書量が増えた（15名）、読書に集中できない時間が増えた（14名）、読書に集中できる時間が増えた（6名）、書籍への書き込みが増えた（2名）などの回答があった。実際に読書量・時間がどの程度増えたのか（減ったのか）、集中できる時間が増えた者もいる一方で集中できない時間が増えた者もいるのはなぜか等、より詳細に調べなくてはならない要素も明らかになったが、電子書籍を上手に活用している学生がいることが確認できた。

これらは、それぞれ電子版と印刷版の各特性がトレ

ードオフの関係になっており、ある一つ特性を見た時、それを長所と捉えるのか短所と捉えるのかによって、電子版を利用したいと考えるのか印刷版を利用したいと考えるのか分かれるのであろう。これらの書籍メディアの特性とその捉え方が、今後の読書文化・習慣にも影響を及ぼしていく可能性があるのではないかと考えられる。

3.3 読書文化・習慣への影響について

読書離れや活字離れと言われるようになって久しいが、確かに本調査でも、それを裏付けるような結果が出ている。表1の「新聞」「書籍」の接触時間平均値は、それぞれ印刷版と電子版を合わせたとしても30分未満である。さらに1ヶ月間の読書冊数の回答結果からも、0冊：49名（約30%）、1冊：22名、2冊：26名、3冊：16名、4冊：9名、5冊以上：49名（約30%）という結果が出ている。0冊と回答した人（不読者）の割合が約30%という結果については、他の調査結果と比較してみたい。大学生協連が毎年実施している学生生活実態調査の結果⁽²⁾からは、1日の読書時間が0分回答（読書習慣のない学生）の割合は48%とされており（読書時間の全体平均値は30.0分）、半数に近い学生が日常的に読書をしていないことが判る。解説によると「中学から高校時代の読書習慣の延長が大学生の読書傾向」になっているようで、さらに「小学校入学前から高校までの全ての時期で「全く読まなかった」人の74.0%は、現在の読書時間も「0」であった⁽²⁾という。

一方、著者の調査では1ヶ月に5冊以上読書する学生の割合が約30%、大学生協連の調査では1日1時間以上読書する学生の割合が26.7%という結果も出ている。質問内容は多少異なるが、両結果から、ある一定数（3割程度）の学生は読書習慣が十分身につけているといえるのではないかと考える。3割程度という数字をどう解釈するのかわについては今後の課題である。

電子書籍の利用率は未だ少ないため、それが読書習慣・文化に及ぼしている影響を明示することはできないが、電子デバイスによるブラウザ系コンテンツへの接触時間の増大が、読書時間を圧迫している可能性については否定できない。さらに、学生の読書文化・習慣のみならず、勉学・研究活動にも影響を及ぼしている可能性についても検討する必要があると考える。

4. おわりに

本稿では、大学生に対するメディア接触調査の結果から、電子書籍によって変化した読書行動、メディア特性の捉え方の違いが電子書籍を利用するか否かの判断に影響を及ぼすこと、さらに学生の読書文化・習慣への影響について考察した。今後も検討を重ね、その知見を教育改善にもつなげていきたい。

参考文献

- (1) 全国出版協会（編）：”出版月報”，2019年1月号，出版科学研究所（2019）。
- (2) 全国大学生協同組合連合会 Web”第54回学生生活実態調査の概要報告”，[2019.6.14最終閲覧]
<https://www.univcoop.or.jp/press/life/report.html>